

## 【巻頭言】

神戸看護学会は、看護学の発展と会員相互の学術的研鑽を図り、もって地域の人々の健康と福祉に貢献することを目的として、2016年4月1日に設立されました。本年度、学会は10年目という節目を迎えます。この記念すべき『神戸看護学会誌』第10巻第1号の発刊にあたり、巻頭言を執筆する機会を賜りましたことを大変光栄に存じます。この機会に、学会設立の使命を改めて振り返りたいと思います。

まず、初代理事長である鈴木志津枝先生が、第1巻の巻頭言で述べられた設立の経緯に触れます。鈴木先生<sup>1)</sup>は、当時、大学の開学20周年を迎えるにあたり、「神戸市看護大学の卒業生や大学院修了生が、看護の質向上や看護学の発展にリーダーシップを発揮していくために、大学として何ができるのか」を問い続けられました。その中で、「地域の人々の健康と福祉への貢献を可視化したい」という思いから、神戸看護学会の設立を構想されたと記されています。また、学会誌の役割として「看護の発展に有用な情報や貴重な研究成果をタイムリーに紹介すること」が掲げられました。

この設立時の使命がどの程度果たされてきたのか、10年の歩みを振り返ります。神戸看護学会は、毎年、定例の学術集会を盛大に開催し、最新の知見の共有や研究成果の発表を通じて、臨床家・研究者・学生など多様な立場の会員が交流し、学び合う場を提供してきました。特筆すべきは、大学の研究者のみならず、神戸市内の保健・医療機関からも多くの参加を得ている点です。これまでに神戸市民病院機構から2名が大会長を務め、学術集会を主催されたことは、地域に根ざした学会としての広がり象徴しています。さらに近年は、学術集会に加えて講演会も毎年開催し、最新の看護に関する知見を学ぶ機会を提供しています。会員には大学教員のみならず、神戸市民病院機構をはじめとする多くの保健・医療関係者、そして卒業生・修了生が名を連ねています。これらの活動から、設立時に期待された使命は概ね達成されていると感じています。

一方で、今後の発展に向けた課題も見えてきています。第一に、会員数が横ばいで推移していることです。学術集会や講演会の開催時には会員が増加する傾向があることから、会員としてのメリットをさらに高める工夫が求められます。第二に、学会誌への論文投稿数が伸び悩んでいる点です。これは、創刊時にも懸念されたように、神戸市看護大学紀要との競合が一因と考えられ、今後、両者の役割の差別化や統合の可能性について検討する必要があります。

神戸市看護大学は本年度、創立30周年を迎え、これまで多くの卒業生・修了生を輩出してきました。神戸看護学会が大学と歩調を合わせながら、卒業生・修了生、そして地域の保健・医療関係者ととともに、地域の保健医療の充実や看護の発展に寄与し続けられるよう、さらなる発展に向けて取り組んでまいりたいと考えております。

神戸看護学会

副理事長・総務委員長 岩本里織

1) 鈴木志津枝：神戸看護学会の設立と学会誌の創刊について、神戸看護学会誌1(1)、1-2、2017。